

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 中国古典に由来する日中熟語や諺の相違点について (1)

著者	凌 志偉
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
巻	89
ページ	123-160
発行年	1994-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/3824">http://hdl.handle.net/10114/3824</a>

## 中国古典に由来する日中熟語や 諺の相違点について (1)

凌 志 偉

日本語には中国の古典に由来する熟語や諺が数多くある。そういった熟語や諺は現代中国語と比較して、用法及び意味の全く同じのものはかなり多いが、日本語独自の用法または現代中国語の全く使われなくなったものも相当ある。中国語を母国語とする人が日本語を勉強する時、こう言った言葉にまごつくことが多い。“随より始めよ”の項を調べると、近年中国で出版された“現代日漢大詞典”(中国商務印書館・日本小学館共編)及び“日漢大辞典”(機械工業出版社)を始めとする主立った辞書は出典をそのまま載せるだけで、みな間違った訳をつけている。日本語を母国語とする人が中国語を学ぶ場合、こう言った熟語や諺をそのまま引用すると、なかなか中国人に理解してもらえないことを良く見かける。近年日本語は欧米から来た外来語を多用する傾向にあり、上記の熟語や諺もすたれつつあるかもしれない。しかし、作家や政治家などは、気のきいたことを書いたり、話したりする時に、まだ中国の古典を良く引用するようである。今回の研究では大辞林(1988年版、三省堂)に集録されている熟語や諺(四字成語は省く)をベースにした。

現代中国語も1919年の五・四運動以降、書き言葉が文語体から口語体が変わり、1949年に中華人民共和国が成立してから、言文一致の傾向がよりいっそう強くなった。今では人民日報を始めとする代表的な新聞の記事は朗読に堪える文体によって書かれている。ただ小説や詩歌などの文学作品にはまだかなり文語が残っていると見て良いだろう。こう言った日本語の熟語や諺の出典である中国の古典が果して現代中国語として使われるかどうかの基準として、1979年版の“現代漢語辞典”, その“補編”(1989年版), 中華成語大辞典(1988年, 吉林文史出版社)など近年出版された現代語の辞書を参照した。

上記の熟語や諺は大きく三つのタイプに分類することができる。

A : 日本語と中国語が用法及び意味の全く同じのもの

A 1 : 日本語も、現代中国語も原文をそのまま引用したもの。

日 : 中 (あた) らずと雖 (いえど) も遠からず。

中 : 虽不中, 不远矣。 (大学)

日 : 過ちては改むるに憚 (はばか) ること勿 (なか) れ

中 : 过则勿惮改。 (論語)

日 : 燕雀 (えんじゃく) 安 (いづく) んぞ鴻鵠 (こうこく) の志を知らんや。

中 : 燕雀安知鸿鹄之志哉。 (史記)

A 2 : 日本語は原文をそのまま引用しているが、現代中国語は若干形を変えているもの。

日 : 股鑑遠からず。

(股鑑不遠。) (詩経)

中 : 可资股鉴。

日 : 棺を蓋いて事定まる。

(蓋棺定事。) (晉書)

中 : 盖棺定论。

日 : 狂瀾を既倒に廻らす。

(廻狂瀾於既倒。) (韓愈)

中 : 挽狂瀾于既倒。

A 3 : 日本語は原文を若干形を変えているが、現代中国語はそのまま使っているもの。

日 : 麻の中の蓬 (よもぎ)

中 : 蓬生麻中, 不扶而直。 (荀子)

日 : 過ちを文 (かぎ) る。

中：文过饰非。 (論語)

日：願みて他を言う。

中：願左右而言他。 (孟子)

**A 4**：日中両国語とも原文を若干形を変えているもの

日：青は藍より出でて、藍より青し。

(青取之於藍，而青於藍。) (荀子)

中：青出于藍而胜于藍。

**B**：日本語はそのまま出典の意味と用法を踏襲しているが、現代中国語はもはや使われなくなったもの、または意味の変わったもの。

**B 1**：現代中国語として使用されなくなったもの。

日：夔 (あつもの) に懲りて脛 (なます) を吹く。

(懲夔吹脛) (楚辭)

中：一朝被蛇咬，十年怕草繩。

日：馨咳 (けいがい) に接す。

(又况乎昆弟亲戚之馨咳其側者乎) (莊子)

中：识荆。亲承馨咳 (古風な言い方)。

**B 2** 現代中国語としてまだ使われてはいるが、意味の変わったもの。

日：兄たり難く弟たり難し。

(元方難為弟，季方難為兄。) (世説新語)

中：不相上下。不分轩輊。

現代中国語の“难兄难弟”はグルになって、悪事を働く、またはどちらも苦境に立たされているの意味です。

日：爾 (なんじ) の出ずるものは爾に反る。

(出乎爾者，反乎爾者也。) (孟子)

中：种瓜得瓜，种豆得豆。

現代中国語の“出尔反尔”は約束をほごにする、前言を翻すの意味で

す。

C：日本語は原典を応用する形で派生的にできたものであるのに対して、中国語は出典の用法や意味をそのまま踏襲するか、または現在では全く使用されなくなったもの。

日：隗より始めよ。

（請自隗始。）

（戰國策）

中：（言い出した人から始めよという意味から）以身作則。率先垂范。

日：立錐の地なし。

（無立錐之地，至貧也。）（呂氏春秋）

中：（人がぎっしりつまっていて、少しのすきまもないという意味から）爆満，挤满了人。

（中国語の出典は生計を立てる場所もないほど貧しいという意味で、現代でもそういう形で使われる。

出典は日，中両国の辞書に拠ったが，相異なる場合，先に書かれ，しかも古代の日本人にも広く読まれていたと思われるものに限り，中国側の出典を採用した。

○逢うは別れの始め

合者離之始，樂兮憂所伏。

白氏文集・卷十四・和夢遊春詩

中：天下无不散之筵席。

○青は藍より出でて藍より青し

學不可以已。青取之於藍，而青於藍。

荀子・勸學

中：青出于藍而胜于藍。

○仰いで天に愧じず，俯して地に愧じず

仰不愧於天，俯不忤於人。

孟子・盡心上

中：仰不愧於天，俯不作於人。俯仰无愧。

◦ 惡事千里を走る（＝行く）

好事不出門，惡事行千里。

北夢瑣言・卷六

中：惡事行千里。惡事傳千里。

◦ 頤（あご）を外す

無説詩，匡鼎來，匡説詩，解人頤。

漢書・匡衡傳

中：（大笑いするという意味から）哈哈大笑。

注；中国語の“解頤”はにっこり笑う（开顔欢笑）という意味です。

◦ 麻の中の蓬（よもぎ）

蓬生麻中，不扶而直。

荀子・勸學篇

中：蓬生麻中，不扶而直。

◦ 足を重ねて立ち，目を側（そばだ）てて見る。

必湯也，令天下重足而立，側目而視矣。

史記・汲黯傳

中：望而生畏。聞風喪胆。重足而立，側目而視。

◦ 朝（あした）に道を聞かば夕べに死すとも可なり

子曰，朝聞道，夕死可矣。

論語・里仁

中：朝聞道，夕死可矣。

◦ 朝（あした）に夕べを謀（はか）らず

吾儕偷食，朝不謀夕，何其長也。

左傳・昭公元年

中：朝不保夕。朝不慮夕。朝不及夕。（“朝不謀夕”は使用頻度が低い。）

128

◦ 価千金

春宵一刻價千金，花有清香月有陰。  
蘇軾・春夜詩

中：价值千金。

◦ 価を二つにせず

常採藥名山，賣於長安市，口不二價，三十餘年。  
後漢書・逸民傳

中：不二价。

◦ 頭隠（かく）して尻（しり）隠さず

王笑曰，此老所謂藏頭露尾身。  
隨筆・燕居雜話

中：藏头露尾

◦ 中（あた）らずと雖（いえど）も遠からず

心誠求之，雖不中不遠矣。  
大學

中：虽不中不远矣。

◦ 葵（あつもの）に懲（こ）りて陰（なます）を吹く

懲熱葵而吹鬣兮，何不變此志也。  
楚亂・九章・惜誦

中：一朝被蛇咬，十年怕草繩。

◦ 網吞舟（どんしゅう）の魚を漏らす

網漏於吞舟之魚，而吏治熙熙，不至於茲。  
史記・酷吏列傳

中：网漏吞舟。

◦ 網無くて淵（ふち）をのぞくな

夫不學而求知，猶願魚而無網焉。心雖勤而無獲矣。  
抱朴子・勸學

中：无网莫窺渊。临渊羨魚，不如退而结网。

- 雨車軸（しゃじく）の如し  
獨龍注雨如車軸，不畏不售畏不續。  
王安石・夢中作詩

中：傾盆大雨。瓢泼大雨。滂沱大雨。

- 雨塊（つちくれ）を破らず  
天下太平，國無夭傷，歲無荒年，當此之時，雨不破塊，風不鳴條，旬以一雨，雨必以夜。  
鹽鐵論・水旱

中：歌舞升平。国泰民安。海不扬波。

- 雨に沐（かみあら）い風に櫛（くしけず）る  
沐甚雨櫛疾風，置萬國。  
莊子・天下

中：栉风沐雨。沐雨栉风。

- 過（あやまち）を文（かざ）る  
小人之過也必文。  
論語・子張

中：文过饰非。

- 過（あやまち）を觀（み）て斯（ここ）に仁（じん）を知る  
人之過也，各於其黨，觀過斯知仁矣。  
論語・里仁

中：观过知仁。

- 過っては則（すなわ）ち改むるに憚（はばか）ること勿（なか）れ  
主忠信，無友不如己者，過則勿憚改。  
論語・學而

中：过则勿憚改。



130

◦新（あら）たなる月

三五夜中新月色，二千里外故人心。

白居易「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九詩」

中：望月。満月。

注；現代中国語では“新月”は三日月を指す。

◦新たに沐（もく）する者は必ず冠（かんむり）を弾（はじ）く

新沐者必彈冠，新浴者必振衣。

楚辭・漁父辭

中：新沐者必彈冠。

◦蟻（あり）の穴から堤（つつみ）も崩（くず）れる

千丈之堤，以螻蟻之穴潰。

韓非子・喻老

中：千里之堤，潰于蚁穴。

◦晏子（あんし）の御（ぎょ）

晏子為齊相，出，其御之妻從門閉而闕其夫。其夫為相御，擁大蓋，策駟馬，意氣揚揚，甚自得也。既而歸，其妻請去。夫問其故。妻曰，晏子長不滿六尺，身相齊國，名顯諸侯。今者妾觀其出，志念深矣，常有以自下者。今子長八尺，乃為人僕御，然子之意自以為足，妾是以求去也。其後夫自抑損。晏子怪而問之，御以實對。晏之薦以為大夫。

史記・晏嬰傳

中：借他人的威信扬扬自得。

◦井の中の蛙（かわず）大海（たいかい）を知らず。

井蛙不可以語於海者，拘於虛也。

莊子・秋水

中：井底之蛙。

◦夷（い）を以って夷を制す [=攻む]

議者咸以羌胡相攻，縣官之利，以夷伐夷，不宜禁護。

後漢書・鄧訓傳

中：以夷伐夷。以夷攻夷。以夷制夷。

- 威（い）ありて猛（たけ）からず  
子温而厲，威而不猛，恭而安。

論語・述而

中：威而不猛。

- 帷（い）を下（くだ）す  
下帷講誦，三年不窺園。

史記・董仲舒傳

中：設帳授徒。下帷講誦（使用頻度は低い）。

- 意（い）至りて筆隨（したが）う  
吾生平作文，意之所到，則筆力曲折隨之，無不盡意。

春渚紀聞・東坡事實

中：意到筆隨。

- 意に介する  
所亡少少，何足介意。

後漢書・度尚傳

中：介意

- 意に適（かな）う（＝中（あた）る）  
百蠻之君，靡不鄉風承流稱意，遠方殊俗，重譯而朝，澤及方外。

史記・三王世家

中：中意。称心如意。

- 意を決する  
思之既熟，決意而行。

梁武帝・凡百箴

中：決意～。

132

◦ 意を体（たい）する。

寺僧之主持者為溟人，頗能體主人意款客焉。

徐霞客遊記・滇遊日記六

中：体察其意。

◦ 意を尽くす

子曰，聖人立象以盡意，設卦以盡情偽，繫辭焉以盡其言。

易經・繫辭傳

中：充分表达意見。暢抒己見。

◦ 意を強くする

吳公差強人意，隱若一敵國矣。

後漢書・吳漢傳

中：加強信心。

◦ 意を迎える

智算警穎，迎意輒悟。

唐書・楊貴妃傳

中：迎合

◦ 彝（い）を秉（と）る

民之秉彝，好是懿德。

詩經・大雅・烝民

中。執守天之常道。（秉彝）。

◦ 異域（いいき）の鬼となる

生為別世之人，死為異域之鬼。

李陵・答蘇武書

中：死为异域之鬼。

◦ 言うは易く行（おこな）うは難（かた）し

言之易，而行之難。

鹽鐵論・利談

中：说着容易，做起来难。说时容易做时难。

家給（きゅう）し人（ひと）足る

天下家給人足，頌聲並作。

漢書・貢禹傳

中：人给家足。家给人足。

○家に杖（つえ）つく頃（ころ）

五十杖於家，六十杖於郷，七十杖於國，八十杖於朝。

禮記・王制

中：半百。知命。

○家貧しくして孝子（こうし）顯（あら）わる

家貧顯孝子，世亂識忠臣。

寶鑑

中：家貧显孝子。家贫出孝子。

○家貧しければすなわち良妻を思う

魏文侯謂李克曰，先生嘗教寡人曰，家貧則思良妻，國亂則思良相。

史記・魏世家

中：家貧則思良妻。

○怒りを遷（うつ）す

有顔回者，好學，不遷怒，不貳過。

論語・雍也

中：迁怒。

○意気相投ず

由來意氣合，直取性情真。

杜甫・贈王二十四侍御

中：意气相投

- 石が流れて木の葉が沈む。

夫衆口之毀譽，浮石沈木。

陸賈新語・辯惑

中：浮石沉木。事物顛倒，不合道理。

- 石に漱（くちすす）ぎ流れに枕（まくら）す

楚少時欲隱居，謂濟曰：「當欲枕石漱流。」誤云「漱石枕流。」濟曰：「流非可枕，石非可漱。」楚曰：「所以枕流，欲洗其耳；所以漱石，欲厲其齒。」

晉書・孫楚傳

中：死不服輸。狡辯。

- 石に立つ矢

廣出獵，見草中石，以為虎而射之，中石没鏃，視之石也。

史記・李廣傳

中：矢（箭）可穿石。精诚所至，金石为开。

- 石に枕（まくら）し流れに漱（くちすす）ぐ

枕石漱流，吟詠緼袍，偃息於仁義之途。

三國志・蜀書・彭蒙傳

中：隱居。菑居。息景（影）。枕石漱流。

- 石を抱（いだ）きて淵（ふち）に入る

故懷負石而赴河，是行之難為者也，而申徒狄能之。

荀子・不苟

中：負石赴河。

- 衣食足れば則（すなわ）ち榮辱（えいじょく）を知る

倉廩實則知禮節，衣食足則知榮辱。

管子・牧民

中：衣食足則知榮辱。

◦ 至れり尽くせり。

至矣盡矣，不可以加矣。

莊子・齊物論

中：无微不至。尽善尽美。

◦ 一を聞いて十を知る

回也，聞一以知十。賜也，聞一以知二。

論語・公冶長

中：聞一知十。举一反三。触类旁通。

◦ 一を以て万（ばん）を知る（＝察す）

君子故曰，以近知遠，以一知萬，以微知明，此之謂也。

荀子・非相

中：以一知万。聞一知十。举一反三。触类旁通。

◦ 一言以て之を蔽（おお）う

子曰：詩三百，一言以蔽之，曰思無邪。

論語・為政

中：一言以蔽之。

◦ 一日の計は晨（あした）にあり

一年之計在於春，一日之計在於晨。

梁元帝纂要

中：一日之計在于晨。

◦ 一日の長

陶冶世俗，與時浮沉，吾不如子。論王霸之余策，覽倚仗之要害，吾似有一日之長。

世說新語・品藻

中：一日之长（cháng）

注：日本で出版された辞典は出典として「以吾一日長乎爾，毋吾以也。」（論語・先

進)を挙げているが、経験・技能・知識などに若干すぐれているという意味から、出典は上記である。

- 一人(いちにん)虚を伝うれば万人実(じつ)を伝う

一犬吠形，百犬吠聲；一人傳虚，百人傳實。

王符・潜夫論・賢難

中：一犬吠形，百犬吠聲。

- 一木大厦(たいか)の崩(くず)るるを支(ささ)うる能(あた)わず  
大厦將顛，非一木所支也。

王通・文中子・事君篇

中：一木难支。独木难支。

- 一葉(いちよう)落ちて天下の秋を知る

唐人有詩云：「山僧不解數甲子，一葉落知天下秋。」

宋・唐庚・文録

中：一叶知秋。

- 佚(いつ)を以て勞を待つ

以近待遠，以佚待勞。

孫子・軍爭

中：以逸(佚)待勞。

- 一家を機杼(きちょ)す

常語人云，文章須自出機杼成一家風骨，何能共人同生活也。蓋譏世人好竊他文，以為己用。

北史・祖瑩傳

中：独出机杼。自出机杼。

- 一家を立てる(=成す)

公權初學王書，遍閱近代筆法，體勢勁媚，自成一家。

舊唐書・柳公權傳

中：自成一家。

- 一竿（いっかん）の風月  
回首壯遊真昨夢，一竿風月老南湖。  
陸游・感舊詩

中◦一竿風月。

- 一筭（いっき）の功  
為山九仞，功虧一筭。  
書經・旅獒

中：功亏一筭。

- 一饋（いっき）に十起  
禹之時，以五音聽治，……當此之時，一饋而十起，一沐而三捉髮，以勞天下之民。  
淮南子・汜論訓

中：一饋十起

- 一掬（いっきく）の涙  
遙傳一掬淚，為我達揚州。  
李白・秋浦歌

中：一掬泪

- 一驚（いっきょう）を喫する  
大尉見了又喫一驚，撇了手爐叫一聲，我今番死也。  
水滸傳・第一回

中：吃一惊。

- 一犬虚（きよ）に吠（ほ）ゆれば万犬（ばんけん）実（じつ）を伝う  
諺曰，一犬吠形，百犬吠聲，世之疾，此固久矣哉。  
王符・潜夫論・賢雉

中：一人传虚，万人传实。一犬吠形，百犬吠聲。



138

○ 一見旧の如し

一見如舊識，一言知道心。

王維・送權二詩

中：一見如故。

○ 一粲（いっさん）を博す

軍人粲然而笑。

穀梁傳・昭公四年

中：以博一粲。

○ 一糸（いっし）掛けず

① 放閑老兵殊耐冷，一絲不掛下冰灘。

楊萬里誠齋集二七清曉洪澤放閑四絕句詩

中：（真っ裸であるという意味から）一糸不挂。

② 遍界難藏真薄相，一絲不掛且逢場。

蘇軾・戲贈虔州慈雲寺鑿老

中：（のびのびと自由である。かかわるものがないという意味から）了无牽挂。

○ 一將功成りて万骨（ばんこつ）枯る

憑君莫話封侯事，一將功成萬骨枯。

曹松・亥歲詩

中：一將功成万骨枯。

：一笑（いっしょう）に付す

乃知朝士妄望，自古已然，可付一笑。

陸游・老學庵筆記卷四

中：付之一笑。

○ 一寸（いっすん）の光陰（こういん）輕（かる）んずべからず

少年易老學難成，一寸光陰不可輕。

朱熹・偶成詩

中：一寸光阴不可轻。

- 一世（いっせい）を風靡（ふうび）する  
世從俗而變化兮，隨風靡而成行。  
東方朔七諫沈江

中：風靡一時。

- 一簞（いったん）の食（し）一瓢（いっぴょう）の飲（いん）  
一簞食，一瓢飲，在陋巷。  
論語・雍也

中：一簞食，一瓢飲。

- 一旦（いったん）緩急（かんきゅう）あれば  
今公常從數騎，一旦有緩急，寧足恃乎！  
史記・袁盎傳

中：一旦危急。

- 一籌（いっちゅう）を輸（ゆ）する  
問君此笑是喜不，道得老夫輸一籌。  
陸游・九月六夜夢中作笑詩

中：略遜（輸）一籌。稍遜一籌。

- 一朝（いっしょう）の怒りにその身を忘る  
一朝之忿，忘其身，以及其親。  
論語・顔淵

中：一朝之忿

- 一丁字（いっていじ）を識（し）らず  
今天下無事，汝輩挽得兩石力弓，不如識一丁字。  
舊唐書張延賞傳附張弘靖

中：目不识丁。

- 一擲（いってき）乾坤（けんこん）を賭（と）す  
誰勸君王回馬首，真成一擲賭乾坤。  
韓愈・過鴻溝詩

中：一擲乾坤

- 一頭（いっとう）地を抜く  
軾以書見脩。修語梅聖俞曰，吾當避此人出一頭地。  
宋史・蘇軾傳

中：出人頭地。出類拔萃。

- 一敗地に塗（まみ）れる  
今置將不善，壹敗塗地。  
史記・高祖本紀

中：一敗塗地。

- 一髮千鈞（せんきん）を引く  
漢氏以來，群儒區區修補，百孔千瘡，隨亂隨失，其危如一髮引千鈞。  
韓愈・與孟尚書書

中：一髮千鈞

- 一斑（いっばん）を見て全豹（ぜんびょう）をト（ぼく）す  
此郎亦管中窺豹，時見一斑。  
晉書・王獻之傳

中：窺豹一斑。管中窺豹。

- 一飯（いっばん）の徳  
一飯之徳必償，睚眦之怨必報。  
史記・范雎傳

中：一飯之徳必償。

- 一夫（いっぶ）関（かん）に当たれば万夫（ばんぶ）開くなし  
劍閣崢嶸而崔嵬，一夫當關，萬夫莫開。

李白・蜀道難

中：一夫当关，万夫莫开。

◦ 鷸蚌（いつぼう）の争い

趙且伐燕，蘇伐為燕謂惠王曰，今者臣來，過易水，蚌方出曝，而鷸啄其肉，蚌合而鉗其喙。鷸曰，今日不雨，明日不雨，即有死蚌。蚌亦謂鷸曰，今日不出，明日不出，即有死鷸。兩者不肯相舍，漁者得而並食之。

戰國策・燕策二

中：鷸蚌相争，漁翁得利。

◦ 命長ければ辱（はじ）多し

多男子則多懼，富則多事，壽則多辱，是三者非所以養德也。

莊子・天地

中：壽則多辱。

：命は義に縁（よ）りて輕し

情為恩死，命緣義輕。

後漢書・朱穆傳

中：命緣義輕。

◦ 命は鴻毛（こうもう）よりも輕し

人固有一死。或重於泰山，或輕於鴻毛。用之所趨異也。

司馬遷・報任少卿書

中：命有輕于鴻毛。

◦ 命は風前（ふうぜん）の灯の如し

誰能知死時，所趣從何道，譬如風中燈，不知滅時節。

坐禪三昧經五

中：命如風中灯。風灯。風前烛。風烛。

◦ 色（いろ）を作（な）す

王忿然作色曰，王者貴乎，士貴乎。

戰國策・齊策

中：忿然作色。

- 曰（いわ）く言難（がた）し  
敢問，何謂浩然之氣。曰，難言也。  
孟子・公孫丑・上

中：難言之隱。

- 員（いん）に備（そな）わるのみ  
媿媿廉謹，為丞相備員而已，無所能發明功名有著於當世者。  
史記・申屠嘉傳

中：聊备一員。湊數而矣。

- 殷鑑（いんかん）遠からず  
殷鑑不遠，在夏后之世。  
詩經・大雅・蕩

中：可資殷鑑。

- 慙慙（いんぎん）を通ずる  
相如乃使人重賜文君侍者，通慙慙。  
史記・司馬相如傳

中：（男女）私通。苟合。野合。

- 印綬（いんじゅ）を帯びる  
項梁持守頭，佩其印綬，門下大驚擾亂。  
史記・項羽本紀

中。出仕。做官。

- 印綬（いんじゅ）を解（と）く  
其諸臧過者，望風解印綬去。  
後漢書・賈琮傳

中。解綬。辞官。

- 陰徳（いんとく）あれば陽報（ようほう）あり  
夫有陰徳者，必有陽報。有陰行者，必有昭名。

淮南子・人間訓

中：有陰徳必有陽報。善有善報。

- 魚（うお）と水

孤之有孔明，猶魚之有水也。

三國志・諸葛亮傳

中：魚水情深。

- 魚（うお）の釜中（ふちゅう）に遊ぶが若（ごと）し  
遂復相聚偷生，若魚游釜中，知其不可久。

通鑑・漢順帝記下

中：魚游釜中。

- 魚（うお）の水を得（え）たよう

先生與諸葛亮情交日密，關羽、張飛等不悅，先生解之曰，孤之有孔明，猶魚之有水也，願諸君勿復言。

蜀志・諸葛亮傳

中：如魚得水

- 魚（うお）は江湖に相忘る

魚相忘於江湖，人相忘於道術。

莊子・大宗師

中：悠然自得。

- 魚（うお）を得て釜（うえ）を忘る

筌者所以在魚，得魚忘筌。

莊子・外物

中：得魚忘筌。过河拆桥。

- 浮世は夢

而浮生若夢，為歡幾何。

李白・春夜宴從弟桃李園序

中。浮生若夢。

○兔死すれば狐（きつね）これを悲しむ

兔死狐泣，李氏滅，夏氏寧獨存？

宋史・李全傳

中：兔死狐悲。

○牛に汗し棟（むなぎ）に充つ

其為書，處則充棟宇，出則汗牛馬。

柳宗元・陸文通先生墓表

中：汗牛充棟

○羽觴（うしよう）を飛ばす

開瓊筵以坐花，飛羽觴而醉月。

李白・春夜宴從弟桃李園序

中：觥籌交錯。

○内に省みて疚（やま）しからず

内省不疚，夫何憂何懼。

論語・顔淵

中：内省不疚。

○梁（うつぼり）の塵（ちり）を動かす

魯人虞公發聲清越，歌動梁塵。

文選・注・劉向別錄

中：歌声绕梁。

○馬の耳に風

世人聞此皆掉頭，有如東風射馬耳。

李白・答王十二寒夜獨酌有懷

中：马耳东风

◦馬を鹿（しか）

趙高欲為亂，恐群臣不聽，乃先設驗，持鹿獻於二世，曰，馬也。二世笑曰，丞相誤邪？謂鹿為馬。

史記・秦始皇本紀

中：指鹿为马。

◦海波を揚げず

天之不迅風疾雨也，海不溢波也，三年於茲矣。

韓詩外傳

中：海不扬波。

◦有無（うむ）相通ずる

此天下之中，交易有無之路通。

史記・越世家

中：互通有无。

◦烏有（うゆう）に帰（き）す

楚使子虚使於齊，王悉發車騎，與使者出畋。畋罷，子虚過姪烏有先生，亡是公存焉。

司馬相如・子虚賦

中：①（何もなくなってしまうという意味から）化为乌有。

②（火災などですべてなくなるとの意味から）化为灰烬。

◦恨み骨髓（こつずい）に徹す

繆公之怨此三人，入於骨髓。

史記・秦本紀

中：恨之入骨。恨入骨髓。

◦恨みに報ゆるに徳を以てす

報怨以德。



老子・六三章

中：以德報怨。

◦ 恨みを飲む

自古皆有死，莫不飲恨而吞聲。

江淹・恨賦

中：飲恨。

◦ 雲泥（うんでい）の差

雖乘雲行泥，棲宿不同，每有西風，何嘗不嘆。

後漢書・矯慎傳吳蒼遺慎書

中：云泥之別。天壤之別。

◦ 運用（うんよう）の妙は一心に存す

陣而後戰，兵法之常。運用之妙，存乎一心。

宋史・岳飛傳

中：运用之妙，存乎一心。

◦ 絵の事は素（しろ）きを後（のち）にす

絵事（かいじ）は素（そ）を後（のち）にす

繪事後素。

論語・八佾

中：絵事後素。

◦ 穎（えい）を脱す

臣乃今日請處囊中耳。使遂蚤得處囊中，乃穎脫而出，非特其末見而已。

史記・平原君虞卿列傳

中：脱穎而出

◦ 穎水（えいすい）に耳を洗う

許由耕於穎水之陽，堯召為九州長，由不欲聞之，洗耳於穎水濱。

高士傳

中：不求聞達。超然物外。

◦英雄人を欺（あざむ）く

太白縦横，往往疆弩之末，間雜長語，英雄欺人耳。

李攀龍・選唐詩序

中：英雄欺人。

◦易水（えきすい）の歌

風蕭蕭兮易水寒，壯士一去兮不復還。

戰國策燕三

中：易水歌

◦枝の雪

孫康家貧，常映雪讀書。

徐堅・初學記卷二

中：映雪讀書。螢窗雪案。

◦枝を鳴らさず

太平之世，五日一風，十日一雨，風不鳴條，雨不破塊。

論衡

中：風不鳴條。

◦枝を交わす

「連理枝」から出た言葉。

在天願作比翼鳥，在地願為連理枝。

白居易・長恨歌

中：共諧連理。

◦越鳥（えっちょう）南枝（なんし）に巣くう

胡馬依北風，越鳥巢南枝。

文選・古詩十九首

中：越鳥巢南枝。

◦ 榮耀（えよう）に餅（もち）の皮を剥（む）く

鄭澣以儉素自居，尹河南。召甥姪與之會食。有蒸餅。鄭孫去其皮而後食之。澣大嗟怒謂曰，皮之與中何以異也。僕嘗病澆俗驕侈自奉，奈何嚮浮甚於五侯家綺紈乳臭兒也。即因引手取所棄者。鄭孫錯愕失據，器而奉之，澣盡食焉。

事文綴集十七

中：穷奢极侈。

◦ 襟（えり）を正す

蘇子愀然，正襟危坐而問客曰，何為其然也。

蘇軾・前赤壁賦

中：①（衣服を整え，姿勢を正しくするという意味から）正襟（危坐）。

②（まじめな気持で物事に対処するという意味から）認真処理。

◦ 宴安（えんあん）は酖毒（ちんどく）

諸夏親昵，不可棄也。宴安酖毒，不可懷也。

左傳・閔公元年

中：宴安酖毒。

◦ 燄燄（えんえん）は滅（めつ）せずんば炎炎を若何（いかん）せん

燄燄不滅，炎炎若何。涓涓不壅，終為江河。

孔子家語・勸周

中：燄燄不滅，炎炎若何。

◦ 轅下（えんか）の駒（こま）

上怒内史曰，公平生數言魏其、武安長短，今日廷論，局趣效轅下駒，吾并斬若屬矣。

史記魏其武安侯傳

中：观望畏縮，不敢动作。轅下駒。

◦ 遠山（えんざん）の眉（まゆ）

為卷髮，号新髻，為薄眉，号遠山黛。

飛燕外傳

中：远山眉。远山黛。

- 燕雀（えんじゃく）安（いづく）んぞ鴻鵠（こうこく）の志（こころざし）を知らんや

燕雀安知鴻鵠志。

史記・陳涉世家

中：燕雀安知鴻鵠志。

- 遠水（えんすい）は近火を救わず

失火而取水於海。海水雖多，火必不滅矣。遠水不救近火也。

韓非子・說林

中：遠水不救近火。

- 円石（えんせき）を千仞（せんじん）の山に転ず

決水於千仞之堤，轉圓石於萬仞之溪。

鬼谷子・本經陰符

中：勢不可当。

- 偃鼠（えんそ）河（かわ）に飲むも満腹に過ぎず

偃鼠飲河，不過滿腹。

莊子・逍遙遊

中：偃鼠飲河，不过滿腹。

- 鉛刀（えんとう）の一割（いっかつ）

- ① 鉛刀貴一割，夢想聘良圖。

左思・詠史詩

中：（一度しか使えないという意味から）一次性。只可用一次。

- ② 昔魏絳列國大夫，尚能和輯諸戎，況臣奉大漢之盛，而無鉛刀一割之用乎。

後漢書・班超傳

中：（自分の微力を謙遜している言葉という意味から）鉛刀一割。

150

○遠慮（えんりょ）なければ近憂（きんゆう）あり

子曰・人無遠慮，必有近憂。

論語・衛靈公

中：人无远虑，必有近忧。

○老（お）いたる馬は路（みち）を忘れず

春往冬反，迷惑失道。管仲曰，老馬之智可用也。乃放老馬而隨之，遂得道。

韓非子・說林

中：老马识途。

○老いては子に従（したが）え

一切女身，無所繫屬則受惡名。女人之體，幼則從父母，少則從父，老則從子。

大智度論・九九

中：老来从子。

○老いてはますます壯（さかん）なるべし

大夫為志，窮當益堅，老當益壯。

後漢書・馬援傳

中：老当益壮。

○扇（おうぎ）忌々（ゆゆ）し

裁為合歡扇，團圓似明月，出入君懷袖，動搖微風發。常恐秋節至，涼颯奪炎熱，棄捐篋笥中，恩情中道絕。

文選・班婕妤・怨歌行

中：秋扇見捐

○王侯（おうこう）将相（しょうしょう）寧（いづくん）ぞ種（しゅ）あらんや

壯士不死即已，死即舉大名，王侯將相寧有種乎。

史記・陳勝世家

**中**：王侯将相宁有种乎。将相无种。

◦王侯（おうこう）に事（つか）えずその事（こと）を高尚（こうしょう）にす

上九，不事王侯，高尚其事。

易經・蠱卦

**中**：不事王侯，高尚其事。（不服务王侯，固为其人看重自身价值。）

◦王事（おうじ）鹽（もろ）きことなし

王事靡盬，不能蓺稻粱。

詩經・唐風・鶉羽

**中**：王事必須堅牢，不可稍有疏忽。

注；王引之：“鹽者，息也”（やむ）とあり，近年中国で出版された註釈書は上記を王侯の労役はやむことなしと解釈している。

◦王事（おうじ）を以て家事（かじ）を辭（じ）す

不以家事辭王事，以王事辭家事，是上之行乎下也。

春秋公羊傳・哀公三年

**中**：以王事辭家事。

◦往者（おうしゃ）諫（いさ）むべからず

往者不可諫，來者猶可追。

論語・微子

**中**◦往者不可諫。

注；中国語としてはあとの“來者猶可追”の方が良く使われる。

◦王臣（おうしん）蹇蹇（けんけん）躬（み）の故（ゆえ）にあらず

王臣蹇蹇，匪躬之故。

易經・蹇卦

**中**：王臣蹇蹇，匪躬之故。（王臣不避艰险以助君，绝不以个人利害为念。）

◦応接（おうせつ）に暇（いとま）がない

山川自相映發，使人應接不暇。

世説新語・言語

中：应接不暇。

○鸚鵡（おうむ）よく言えども飛鳥（ひちょう）を離れず

鸚鵡能言，不離飛鳥。猩猩能言，不離禽獸。

禮記・曲禮上

中：鸚鵡能言，不離飛鳥。

○屋烏（おくう）の愛

愛人者，兼其屋上之烏。

尚書大傳・大戰

中：愛屋及烏。

○屋下（おくか）に屋（おく）を架（か）す。屋上（おくじょう）屋（おく）を架す。

魏晉以來，所著諸子，理事重複，遞相模倣，猶屋下架屋，牀上施牀耳。

顏之推・顏氏家訓・序致

中：屋上架屋。屋上架屋。疊床架屋。

屋漏（おくろう）に愧（は）じず

相在爾室，尚不愧於屋漏。

詩經・大雅

中：不愧屋漏。

○奢（おご）る者は心嘗（つね）に貧し

奢者富不足，儉者貧有余。奢者心嘗貧，儉者心嘗富。

譚子化書・儉化・天牧

中：奢者心嘗貧。

○鴛鴦（おし）の衾（ふすま）

怨衾久別難為夢，鳳管遙聞更起愁。

錢起錢考功集八長信怨詩

中：怨衾。鴛鴦被。

- 教うるは学ぶの半（なか）ば  
惟數學半，念終始典於學。

書經・說命・下

中：教学相長

- 頤（おとがい）で人を使う  
自公卿以下，皆頤指氣使，無不嚮懼。  
舊唐書・楊國忠傳

中：頤指氣使。

- 同じ穴の貉（むじな）＝一つの穴の貉  
古與今如一丘之貉。

漢書・楊惲傳

中：一丘之貉。

注；貉は最初同類・仲間という意味だったが、のちに日本語も、中国語も悪者についていうようになった。

- 己（おのれ）達せんと欲して人を達せしむ  
夫仁者己欲立而立人，己欲達而達人。

論語・雍也

中：己欲達而達人。

- 己（おのれ）に克（か）ち礼に復（かえ）る  
克己復禮為仁，一日克己復禮，天下歸仁焉。

論語・顔淵

中：克己復礼。

- 己（おのれ）に如（し）かざる者を友とするなかれ  
主忠信，毋友不如己者。過則勿憚改。



論語・學而

中：毋友不如己者。

- 己（おのれ）の欲（ほっ）せざる所は人に施す勿（なか）れ  
其恕乎，己所不欲，勿施於人。

論語・衛靈公

中：己所不欲，勿施於人。

- 己（おのれ）を枉（ま）ぐ  
吾未聞枉己而正人者也，況辱己以正天下者乎。

孟子・萬章上

中：枉己（正人）

- 己（おのれ）を虚（むな）しゅうす  
周既克殷，以箕子歸，武王親虚己而問焉。

漢書・五行志上

中：虚己以听。虚己受人。

- おひげの塵（ちり）を払う  
丁謂出（寇）準門至參政，事準甚謹。嘗會食中書，羹汚準鬚，謂起，徐拂之。準笑曰，參政國之大臣，乃為官長拂鬚邪。

宋史・寇準傳

中：溜須拍馬。

- 思い内であれば色外にあらわる  
此謂誠於中，形於外。

大學

中：思于中則形于外。

- 思い半（なか）ばに過ぐ  
知者觀其象辭。則思過半矣。

易經・繫辭・下

中：①（考えてみて思い当たることが多いという意味から）思过半矣。

②（考えた以上なので感無量であるという意味から）感慨良多。

○ 思い邪（よこしま）なし

詩三百，一言以蔽之，曰，思無邪。

論語・為政

中：思无邪。

○ 面（おもて）を冒（=犯）（おか）す

桓公間置吏於管仲，曰，犯顔極諫，臣不如東郭牙，請立以為諫臣。

韓非子外儲左下

中：犯顔進諫。

○ 可（か）もなく不可もなし

我則異於是，無可無不可。

論語・微子

中：无可无不可。

○ 科（か）に盈（み）ちて後（のち）進む

原泉混混，不舍晝夜。盈科而後進，放乎四海。

孟子・離婁下

中：盈科后进。

○ 寡（か）は衆（しゅう）に敵せず

寡固不可敵衆，弱固不可以敵強。

孟子・梁惠王上

中：寡不敌衆。

○ 駕（が）を枉（ま）げる

此人可就見，不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。

蜀志・諸葛亮傳

中：枉駕。移樽就教。

○ 隋（かい）より始めよ

今王誠欲致士，先從隋始，隋且見事，況賢於隋者乎。

戰國策・燕策

中：（事を始めるには、まず自分自身が着手せよという意味から）以身作則。率先示范。表率。

○ 凱歌（がいか）をあげる

凱歌（がいか）を奏する

凡軍大獻，教愷（＝凱）歌，遂唱之。

周禮春官樂師

中：奏凱歌。

○ 会稽（かいけい）の恥（はじ）

苦身戮力，與勾踐深謀二十余年，竟滅吳報會稽之恥。

史記・越世家

中：報会稽之恥

○ 解語（かいご）の花

明皇秋八月，太液池有千葉白蓮數枝盛開<略>帝指貴妃示於左右曰，爭如我解語花。

開元天寶遺事

中：解語花

○ 骸骨（がいこつ）を乞（こ）う

愚不能復治東阿，願乞骸骨。

晏子春秋・重而異者

中：告老还乡。解甲归田。乞骸骨（使用頻度は低い）。

○ 睚眦（がいさい）の怨（うら）み

一飯之德必償，睚眦之怨必報。

史記・范雎傳

中：睚眦必報。

◦咳唾（かいだ）珠（たま）を成す

勢家多所宜，咳唾自成珠。

趙壹・刺世疾邪賦

中：咳唾成珠。

◦快刀乱麻（らんま）を断（た）つ

高祖嘗試觀諸子意識，各使治亂絲，帝獨抽刀斬之，曰，亂者須斬。

北齊書文宣紀

中：快刀斩乱麻。

◦海棠（かいどう）睡（ねむり）未（いまだ）足らず

上皇登沈香亭，召太真妃子，妃子時卯醉未醒，命力士從侍兒，扶掖而至，上皇笑曰，豈是妃子醉，直是海棠睡未足耳。

佩文韻府引楊太真外傳

中：海棠睡未足。

◦顧（かえり）みて他（た）を言う

王顧左右而言他。

孟子・梁惠王下

中：顾左右而言他。

◦河海（かかい）は細流を挾（えら）ばず

泰山不讓土壤，故能成其大。河海不擇細流，故能就其深。

史記・李斯傳

中：河海不择细流。

◦河漢（かかん）の言（げん）

吾聞言於接與，大而無當，往而不返。吾驚怖其言，猶河漢而無極也。大有逕庭，不近人情焉。

莊子・逍遙遊

中：迂闊之论。不着边际。

- 蝸牛（かぎゅう）角上（かくじょう）の争い  
有國於蝸之左角者，曰觸氏，有國於蝸之右角者，曰蠻氏；時相與爭地而戰，伏尸數萬，逐北旬有五日而後反。

莊子・則陽

中：蝸角之争。蛮触之争。

- 隠れたるより現るるはなし  
莫見乎隠，莫顯乎微。

中庸

中：欲盖弥彰。

- 影（かげ）の形（かたち）に随（したが）うが如し  
然故下之事上也，如響之應聲也。臣之事主也，如影之從形也。

管子・任法

中：如影随形。

- 影（かげ）を畏（おそ）れ迹（あと）を悪（にく）む  
人有畏影惡迹而去之走者，舉足愈數，而迹愈多。走愈疾，而影不離身。自以為尚遲，疾走不休，絕力而死。不知處陰以休影，處靜以息迹，愚亦甚矣。

莊子・漁父

中：畏影惡迹。

- 佳肴（かこう）ありと雖（いえど）も食らわずんばその旨（うま）きを知らず  
雖有嘉肴，弗食不知其旨也。雖有至道，弗學不知其善也。

禮記・學記

中：虽有嘉肴，弗食不知其旨也。

- 家書（かし） 万金（ばんきん）に抵（あた）る  
烽火連三月，家書抵萬金。

杜甫・春望詩

中：家书抵万金。

◦ 華胥（かしよ）の国に遊ぶ

（黄帝）晝寢而夢，遊於華胥氏之國。

列子・黄帝

中：睡午觉。

注：中国語の「华胥梦」は夢を見るという意味であって，昼寝をするとは限らない。

◦ 風枝を鳴らさず

風不鳴條，風不破塊，五日一風，十日一雨。

論衡・是應

中：风不鸣条。

◦ 風に櫛（くしけず）り雨に沐（かみあら）う

雨に沐い，風に櫛るを参照して下さい。

◦ 風に順（したが）いて呼ぶ

登高而招，臂非加长也，而見者遠，順風而呼，聲非加疾也，而聞者彰。

荀子・勸學

中：顺风而呼。

◦ 風に靡（なび）く草

君子之德風也，小人之德草也。草上之風必偃。

論語・顔淵

中：草随风靡

◦ 風の前の塵（ちり）〔燈火（ともしび）〕

百年未幾時，奄若風中燭。

古樂府・怨詩行

中：①（物事のもろくはかないことのたとえという意味から）風中之燭。

②（危険が迫っていることのたとえという意味から）迫在眉睫。

注；中国語の“风烛”は主に年を取り，病弱であるという意味で使われる。

○風を吸（す）い露（つゆ）を飲む

藐姑射之山，有神人居焉。肌膚若冰雪，綽約若處子，不食五谷，吸風飲露。

莊子・逍遙遊

中：吸風飲露

○河清（かせい）を俟（ま）つ

周詩有之，曰，俟河之清人壽幾何。

左傳・襄公八年

中：俟河之清

○苛政（かせい）は虎（とら）より猛（たけ）し

夫子曰，小子識之，苛政猛於虎也。

禮記・檀弓下

中：苛政猛于虎。

○肩を並べる

吾烹人之兄，與其弟併肩而事其主。

史記・田儼

中：①（並んで立つという意味から）并肩。

②（対等な地位に立つという意味から）并駕齊驅。

○堅き氷は霜を履（ふ）むより至る

履霜堅冰至。

周易・坤

中：履霜堅冰。

続く